

フランス世紀末文学叢書 I

パルジファルの復活祭

——世紀末傑作短篇集——

ジョゼファン・ペラダン／ジュール・ラフォルグ

ピエール・ルイス 他

曾根元吉／倉智恒夫／川口顕弘／釜山 健

篠田知和基／小湊昭夫／志村信英／森茂太郎 訳

フランス世紀末文学叢書①

バルジファルの復活祭

定価 三四〇〇円

一九八八年三月五日 初版第一刷印刷

一九八八年三月一〇日 初版第一刷発行

訳者 曾根元吉／倉智恒夫／川口顕弘／釜山健
篠田知和基／小瀧昭夫／志村信英／森茂太郎

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八

電話 〇三(九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 大日本印刷株式会社・セイユウ写真印刷株式会社
製本 大日本製本株式会社

La Pâque de Parsifal

パルジファルの復活祭

——世紀末傑作短篇集——

ジョゼファン・ペラダン
ジュール・ラフォルグ
ピエール・ルイス 他

曾根元吉／倉智恒夫
川口顕弘／釜山 健
篠田知和基／小瀧昭夫
志村信英／森茂太郎
訳



口絵選定 遊澤龍彦
装幀 山下昌也

目 次

ジュール・バルベール・ドルヴィイ（川口顕弘訳）

歴史のひとま

九

ジュール・ラフォルグ（森茂太郎訳）

ベルリン復讐奇譚

三

ラシルド（志村信英訳）

血を啜るもの

四

アンティノウスの死

五

ジョン・アントワヌ・ノー（篠田知和基訳）

エメラルドの目

六

エフライム・ミカエル（曾根元吉訳）

アルメンタリア

七

航跡

八

囚われの女

九

J・H・ロニ兄（川口顕弘訳）

大異変

一〇

マリーの庭

一一

ジョゼファン・ペラダン（倉智恒夫訳）

バルジファルの復活祭	一三
カチユール・マンデス（川口顕弘訳）	
処女たち	一四七
捧げもの	一五四
ポール・アダン（篠田知和基訳）	
太陽の怒り	一五五
アルフォンス・アレ（小潟昭夫・篠田知和基訳）	
コラージュ	一七五
用心深い犯罪者	一八〇
ただ乗り！	一八三
五月点描	一八七
厄介な謎	一九二
子牛	一九九
哀れなセザリヌ	二〇二
ユベール・ステイルネ（篠田知和基訳）	
間借人	二〇九
シャルル・ファン・レルベルグ（篠田知和基訳）	
超自然の選択	二一七

ピエール・ルイス（釜山健訳）

神秘のぼら 二四三

前代未聞の訴訟事件 二四六

ジェラール・ドゥヴィユ（志村信英訳）

美しい仮面 二五五

知らない女 二六五

気まぐれの青葉棚のした 二七三

古代の頭 二八〇

レミ・ド・グールモン（倉智恒夫訳）

サンギユリエ城 二九一

解題 二九

口絵 カルロス・シュヴァーベ 《墓掘り人の死》

ジュール・バルベール・ドルザイ

Une Page d'Histoire

歴史の一こま（一六〇三年）

I

私は毎年さまざまな感銘を求めて、わが郷里ノルマンディに行く。だが今年は感銘の深さの点で、新たに私の個人的な思い出に加わりそうな事柄は、一つだけしか見出せなかった。私の場合、このような思い出の力は極めて強く——おそらく常軌を逸しているほどなので——思い出には実際、亡霊のごとき力があると書きたくなるほどである。……私の住む西海岸地方の町——わが若かりし頃、この町をあれほど光輝あらしめていたものすべてを失い、今は見棄てられた古代の石棺さながらに、虚ろでうら悲しい町——この町を、私はずっと以前から《わが亡霊の町》と呼んでいた。そんな町に住んでいると言って私を非難し、かつ呆れている友人たちに、彼らから見れば理解しがたい愛着を正当化しようとしてのことである。事実、かくも異様なまでに私をこの町に結びつけているものは、消え去りしわが過去の亡霊たちだった。「かの町の」幽霊がいなかったとしたら、およそ私は

そこへ戻ることもなかったであろう！

その明るい石畳の、人影まれな街々を歩いて行くとき、かつて私はこうした亡霊たちに付き添われずにいたことはない。彼らは普通、我々に付きまといっている暇などはなく、夜でもなければ戻って来てするするとカーテンを引いたり、「かつて彼らの口たりしもの」を、我々の口に重ねたりするようなことはない。ましてその口にはもはや、かつて我々を酔わしめた息吹もない！……けれども否応なく私に付きまとうこれらの亡霊たちは、昼間さえ、また街路の中でさえ舞い戻って来るのだ。白昼の明るさにも追い立てられることがないので、亡霊たちはさながら彼らの愛する深々とした夜に包まれてでもいるかのように、陽光燦然たる真昼なか、わが傍らに立ち現れる。そして宵闇ともなれば、却って私には彼らの姿が識別しがたくなってしまふのである。……墓場のような蒼白の美を持つこのうらさびれた町の、うらさびれた通りを物悲しく歩き回る私、たまさか道行く人々は、幾度そんな私に出くわしたことであろう。そして幾度、彼らは私が一人きりでいるのだと思ひ込んだことであらう、事実はそうではなかったというのに！ 私の周囲には一団の人々が——今は亡き人々が——そっくり付いていたのであった。彼らはさながら自分の墓から出て来るかのように、私が歩む舗石の下から現れ、陰鬱な集団となつてどこまでもわが供廻りを勤めるのだ。彼らは私のすぐ間近かにひしめき合っているのだから、私は亡霊たちの顔をはっきりと、研ぎ澄まされた意識を以て、一人ひとり見分けることが出来るのだった。かのエルシノアの城壁の上で、父の幽霊を眼にしたハムレットさながらに。

だが今日私が語りたいと思うのは、これらの人々——家族や親しい友人たち——即ち私の身内とも云うべき亡霊の話ではない。別の二人の話である。その二人は今年、三世紀の「歴史」を隔てながら同じく私の許に出現し、わが心に深く入りこんで来たのだ。まるでむかし私が、彼らを生命ある実体、生身の身体を持った眼に見える人間として知っていたかのように。そのような生身の人間が、さまざまな条件の中でこの呪わしい人生を過ごしたことを確かめるには、実際、その身体を眼で見たり、手で触れたりしなければならぬだろう。この世では、肉体は透明ではないからであり、また我々がこよなく愛した人々にとっても、この世ではもはや夢の中で我々に抱擁されることしかできない以上、どこまでも我々の心の中に、一個の神秘を残しておかねばならないからだ。疑いと愛惜と、絶望の神秘を……おそらくこの二人の亡霊も、やがてわが身内たる亡霊たち、もはや私から離れようとせぬ亡霊たちの、あの陰気なお供の列に加わるのではあるまいかと懸念されるのだが——私は歳月に依って消し去られた彼ら二人の物語の痕跡を、即ちその一族の恥辱と終焉の物語を、出来るかぎり大急ぎで拾い集めたのだ。その物語は、馬のたてがみにしつく付きまとい、どこまでも離れようとせぬ虻のように、熱中する私の魂にしっかりと結びついて、まさに神秘の持つあの魅惑の力を發揮したのだ。神秘性、これこそはおよそ人間の想像力が有しうる最大の詩であり——そしてまた呪われし無知蒙昧の俗衆にも、哀れや、おそらくは理解しえる唯一の真実なのである。

別な面から云えば、この神秘の物語は、こうした事件には最も向いていない土地で起ったとも云

えよう。確かにここでは最善を尽して、その話を隠し通さねばならなかったのだ！　かくて物語は隠蔽され……かくてまた二人の死後、好事家たちの熱烈な努力にも拘わらず、昨日も今日も人々は未だ充分に知っているとは云えないのだ！　その事実の奥底まで、更にはその最奥部まで究め尽すことは所詮不可能なのであって、ただこの事件をかいま見せ、かつ終了せしめた斧の一撃のみが、微かな光で真実の一端を照し出しているに過ぎない。しかしその物語は、考えるだけに恐怖と……そして魅惑に囚われるほどの（神よ、我らをお赦しあれ！）愛と幸福の物語なのである。惑乱と危険にみちたその魅惑は、それを味わった魂を殆ど罪あるものたらしめ、その罪の共犯者たらしめると思われるほどである。我々もまたひそかにその罪を羨んでいないとはどうして云えよう。

II

この愛と幸福がかくも罪深きものであるからには、それは世に類例なきものであったに違いない。そしてそれらを被い隠していた闇は、いつもながらそうであるように、抑え難い感情のため遂に秘密を明かすことになったのだが、しかしこの時代、人々の心には高貴な活力が存在していたのである。情熱はそれに続く時代よりも遙かに力強く、云わば絶頂に達していたのだ。それ以後、情熱の力は時代と共に下降して行くばかりで、もはや再びあれほどの高みに到達することはおそらくあるまい。時は十六世紀の末つかた、——即ちカトリヌ・ド・メディシスと、フランスのボルジア

家たるヴァロワ王家に依つて進められたイタリア化の産物とも云うべき、狂熱と墮落の時代なのである。その頃、ノルマンディの地に——おお、剛健なノルマンディよ。この地の人々はしっかりと己を持ち、他のどこよりも強い自制心を有していた——或る貴族が住んでいた。この一族は千四百年頃、ブルターニュから渡来し、以後何世代か経るうちにノルマンディに領地を持つ貴族と化したのである。一家は英仏海峡沿岸の東部、シェブルールからほど遠からぬ地に、一本の塔を擁する城塞を所有していた。そして城は塔のおかげでトゥールラヴィルと呼ばれていた。中世の城すべての例に洩れず、この城もまた久しい期間、戦闘用の城塞だったが、ルネッサンスの頃になると時代の柔弱な精神がこの城を変え、かくて諸々の罪深き情熱と肉欲とを城中深く隠さんがため、更には後年達成されることになる運命のため、準備を整えたのであった。

この城に住む一族は、それとは知らずに運命的な名を名乗っていた。即ちその名はラヴァレと云うのだったが、事実、この一族はやがてその不吉な名を「取り下げ」ねばならなかったのである！この一家の最後の子孫二人が罪を犯したのち、一族はこの姓を棄ててしまったのだ。この名を所有する恥辱を拭い去るため、一族は己を抹殺し、自然に滅び去る前にみずから滅んでしまったのである。

さなきだにこの一族は、滅ぶべくして滅んだのである。ただ彼らは他の罪深い邪惡な一族と同じような形で滅んだわけではない。神はこの一族に対して嘆かわしい例外を設けられたのだ。この神の「無法者」は、神のあらゆる掟を犯した末、最後には聖なる贖罪に依つてもたらされた摂理の

掟までも犯すことになったのだ。神を穢してやまぬこの腐敗墮落した残忍な一族の中で、自分自身の罪と積年にわたる己おのが一族の罪を共に贖ったのは、一族中、最大の極悪人だったわけではない。と云って、罪を贖った人間が潔白だったと云うのでもない。もしそうであったならば、その潔白を以て一切の罪は贖われたものを！ いやそもそもラヴァレ家の者には、潔白な人間など存在したことはないのだ。しかし、最後の二人が罪ある者となったのは、彼らの先祖が犯した罪、先祖伝来のおぞましい血統から生じた罪とは異なる別な罪に依るものであった。彼らは先祖の罪に加えて、先祖すら犯したとも思われぬ己が罪を重ねたのだ。とは云うものの、少なくとも彼らの罪に於いては——それが血迷った罪、この墮落した一族伝来の惡に染められた罪であることは事実だが——再びまた忽然として、ほとぼしる人間性が現れたのである。久しい間、このラヴァレ一族の中には絶えて見られず、もはや彼らの冷酷非情な心には存在するはずがないとさえ思われていた人間性が！

III

世代は次々に變ろうと、彼らの一族はどれもこれも並み外れて酷薄な人間ばかりであった。誰もが例外なく己が心の人間的な感情を抹殺していたが、それは彼らが他人を殺戮するのと同じことであつた。この怖るべき一族の最も顯著な特徴は、その残忍な酷薄さであつた。不羈奔放、強情不屈の性格と、一旦情熱に燃えれば飢えた虎にも等しい彼らは、世界は己がためにあると思ひ、昼食の

卵ひとつ焼くにも一個の町全体に火を掛けかねない人々であつた。自分が放蕩者であることを悟るや、彼らの放蕩は流血と死に到るまでやまなかつた。……或る日のこと、彼らのうちの一人は家臣の娘に岡惚れすると、娘を誘拐し、凌辱した末、城をめぐる堀の一つに入れ、ボウリングの標的にして殺してしまつた。彼にとつてはうら若い娘など、ボウリングのピン一個以上のものではなかつたのだ！ 他の一人は、その呪われた城でしょっちゅう行われていた夜の狂宴を後に、朝、泥酔しつつ聖体拝受に出て拒絶されると、まさにその祭壇の段上で、しかも聖体パンを手にしつつ、神父を己が剣で刺し貫き、虐殺した。三人目は自分の手で兄弟を殺害し、かくて己の一族にカインの刻印を記した。それ故やがて一族の中に、再びカインを見出さねばならなかつたのだ。……本来なら何物にもたじろがぬこの地方で、ラヴァレ一族のことを考えると、人々はみなぞつと戦慄するのであつた。そしてこの悲劇の一族に対する恐怖が余りに深刻だつたため、人々はこの一族の中から、いづれ男や女の顔をした生きものではなく、姿も形も未だ見たこともないような化物が生まれてくるのではないかと期待するようになった。土地の人々はラヴァレ家の女が孕むたびごとに、好奇と恐怖の入り混じる戦慄を以て言い合つたのだ。「あの腹から何が出て来るものやら？ この土地にどんなおぞましい化物がひり出されてくることかろう？」。しかし、その怖るべき期待は裏切られた。人々が期待した化物とは、世にも清らかに美しい二人の赤ん坊だつたからである。それはあたかも或る日、忽然としてラヴァレ家の血の池に咲き開いた、二輪の薔薇の花であつた。

何と奇妙な、そして愁わしいアナロジーだろう！ ラヴァレ家の楯形紋章には、先の尖つた一輪